

の土民になぶり殺されて、行方不明者となってしまうわけだ。

夜半に部落をみつけ、やれやれと飯ごう炊きで腹ごしらえをして、そのまま仮眠をとり翌朝クリークをみたら死体がポカポカ浮かんでいた、なんていうのは当たり前のことである。死体のそばの水で炊事したことが分かり、道理で昨夜の飯はよくだしが出ていたなあ、なんて冗談をいってけろりとしている。それくらいの神経になるのである。いや、ならなければつとまらないのである。

この湘桂作戦に私たち昭和十七年徴集現役兵は、初年兵として終始最下位の身分で活躍したわけである。従って多くの戦友をこの異国の地に失っている。初年兵なるがゆえに、隊の下働き要員として炊事洗濯、また馬の手入れはもちろんのこと、それに加えて敵前歩哨、不寝番等、文字通り不眠不休の酷使に、過労から力つきて病に倒れてしまったのである。

兵隊の命も自分のものでない。命令と服従の社会、いかなる無理難題も、うえの者の命令は、絶対であり、自分の持つ体力のすべてを出し尽くして死んでいったの

だ。

命令と服従は軍隊の命である。もちろん古参兵も一度は初年兵の過程を通ってきているわけであるが、忠節という価値観も長年のうちに、うまく形式化して自分らの特権をもって要領という言葉にすりかえてしまう。服従という至上命令すら、要領という技術と、年次すなわち飯の数で初年兵に転嫁させてしまい、保身を図る。初年兵は絶対命令なるがゆえに休む暇なく、一年有余の大作戦に、自分の力の限りをつくして倒れるものが多かった。

中国における私の歩み

誠心は必ず通じる

滋賀県 中村 文雄

私は大正十一年、八反歩の小作農家の長男として生まれ、兄弟は姉三人で、一人息子として可愛がられて育ちました。小学校を終えて高等科に進学、この時より私の

苦難が始まります。

忘れもしない昭和十一年六月十二日朝、元気で田植え作業に出かけたお父^{ちち}が苗代で倒れた。すぐ帰って来いと知らせ受け急いで帰ると、お父^{ちち}は田の畦に寝かされていた。家に運び、医者^{いしや}の往診を受ける。意識不明の状態が二十日あまりつづき、半身付随の中風で五か年の闘病生活ののち、十五年再発にて他界をした。

その間、お母^{おぼ}は看病の毎日、私は学校も六月中にて中途退学をして、慣れぬ野良仕事に。何分にも体力はなく、盲腸炎をわずらい入院と不運の連続、医療費や生活費その他の出費で家計は火の車であった。

さいわいにして、身体も回復して一家の支柱として働かねばならないと、十一歳の子供にもそれなりのはらぎできた。しかし働きにでて子供では賃金も一日八十銭くらいしかもらえず、田のつくりも四反あまりで、家族は八十六歳の祖母と不具者の従兄弟もいる。日々どうやっていこうかとお母と二人で泣いたこともいくどもあった。真暗闇の荒海に櫓も權も折れ果て、波のまにまにただよう捨て小舟、これが我が家の当時の状態であつ

た。

こうした試練をのりこえ、日は過ぎ、昭和十七年現役兵として敦賀歩兵第三六部隊に入隊する。

家には八十九歳の祖母、六十一歳の母、四十五歳の従兄弟を残して、抜け出すことの出来ない軍隊という組織のなか、ひたすら軍務に精励し、生死をいとわず命令に従って中支の戦線を常德、衡陽、湘桂作戦に参加し、二十一年七月復員する。

戦後四十三年、今なお私の脳裏に焼き付いて離れない雨母山、衡陽の戦闘状況と、この戦闘で無念にも敵弾に倒れた戦友の最後状況を記しておこう。

雨母山の戦闘

私は中村(定)分隊長の指揮する第三小隊第一分隊の軽機射手として雨母山の戦闘に参加した。小隊指揮班長は柿本軍曹で、分隊員で記憶に残っているのは土屋上等兵、宮下、中島一等兵、あとは思い出せない。出撃前の腹ごしらえ、忘れもしない里芋の雑炊を腹一杯食べ、元氣一杯雨母山に向かった。小林中隊長のひきいる第二中隊は、一晩がかりの隠密行動である。不気味に静まりか

える山々、第三小隊一分隊は一番下の「コブ」を確保。他の分隊及び小隊は、上段の「コブ」へと前進をする。自分の分隊の確保地点は、岩石が多くて、タコつぼを掘るにもなかなか掘れない。それに今一つには、敵に察知されない隠密行動での作業は、心身ともに疲れ、たこつぼ掘りもそこそこにして、疲れのため皆うつらうつら舟をこぎだす。どのくらい時間が経過しただろう。

突如、したの方に明かりの点滅が一つ二つづいて三つ、これを合図に敵は一斉砲火を浴びてきた。チェコ銃弾、迫撃砲弾がものすごく、しかも的確に射ちこんでくる。そして火器の援護射撃のもとに、チャルメラの突撃ラッパの音とともに、勇敢にも陣前にくはくしてくる。二回三回とつのように攻撃をしかけてくる。中村分隊長、宮下他にも傷ついたようである。しかし、その看護にかかっておれない。なにくそ、負けてなるものと、十一年式軽機をかまえ、無我夢中でうつつうつつうちまくった。

さいわいにも軽機の調子はすこぶるよく、銃身が赤くなるほどうちつつけた。周囲の戦友も、この陣地をとら

れてなるものかと、必死に応戦し、ついに敵を撃退し、陣地を守ることができた。しかしこの戦闘で土屋上等兵、加藤衛生兵、北川一等兵等、苦楽をともにした戦友は戦死をとげてしまった。

戦場掃除ののち、今ははや、かわり果て物いわぬ戦友たちに一人一人別れをつけ引き揚げる足はとつても重かった。途中、足に重傷を受けた池内上等兵が「戦闘に一番頼りになるのは弾だ。俺はもう不要になったから、この弾を持っていけ」と残った小銃弾をだしてくれた。あの気丈な池内上等兵が無念の涙を流し、歯を食いしばり、しっかりと自分の手を握り言葉なく目と目で語り合って別れた。それが池内上等兵とのこんじょうの別れになるうとは、その時むそうだにしなかつたことである。

衡陽タコ陣地の攻撃

毎日毎日がうだるような暑さがつづき、食べるものにもこと欠き、攻撃軍は皆疲れ切っていた。周囲は死屍の悪臭が立ちこめ、まさに生地獄であった。顔をあわせる戦友も顔色は悪く生気を失っている。タコ陣地を目前に

して相たいじし、れいめい・はくぼ攻撃をくりかえすが、敵は一向にひるむようすもなく、がんきょうに抵抗し、そのつど幾人かの犠牲者をだすありさまで、加えて空からの銃撃もあり、衡陽の攻防戦はしれつをきわめた。わが第二中隊は、雨母山の戦闘で、幹部は勿論、兵隊の損耗甚だしく、兵器はあっても射手、筒手にこと欠き、戦力はずいぶん低下していた。自分はさいわいにも健在で、軽機射手として、運を天にまかせ、ただひたすら任務遂行に専念した。十九年八月一日ついに運命の日がやってきた。それはわが家のご先祖の命日が一日、二日、三日とつづくからである。

小林中隊長指揮のもとにはくぼ攻撃が開始され、敵陣地に突撃決行寸前の出来ごとであった。壕に一列となり、身を伏せ、軽機をしっかりと握り、つぎの行動ほっきの時期を待っていたときのことであった。分隊員も誰一人として話をかわすものもなく、汗と泥まみれた顔は異様にひきつり、息づまる一刻、敵の投げた一個の手榴弾が壕の右端に落下、「あっ」煙が出ている。「危ない」思わず大声で「右端に手榴弾が落ちた」と叫ぶ、そのそ

ばに額上等兵・中島一等兵がいた。自分の叫びで額上等兵は、これを捕らえようと身を後に起こした瞬間、残念無念、手榴弾が破裂したのである。

しばらく自分も意識を失ってしまった。ふと気がつき振り返ってみれば、上等兵は胸部破裂ではや息絶えている。中島一等兵は顔面に重傷を負い上歯も吹きとび虫の息、自分は右足、臀部、顔面に負傷、これはほんの二三分のあつというまの出来ごとであった。中隊長の叫ぶ突撃とんざの声が、かすかながらに聞こえていた。

その夜、第四野戦病院に収容されたが、病院とは名ばかりで敷薬のうえにアンペラにゴロ寝で、衛生兵の手当を受けて、やっと生気をとりもどした。しかし暑さと傷の痛み、そして空腹とあつて到底生きた心地はなかったのである。この思いは、ただ自分一人でなく、おそらく傷ついた戦友は皆、同じ思いであつたろうと思う。

額上等兵とも別れ、共に苦勞をし相助け合つて頑張ってきた分隊長もみな傷つき、別れ別れになつてしまった。さいわいにして比較的はやく傷がいえ、中隊復帰をし、宝慶から了尖、茶陵、来陽と、そして最後の集

結地鹿角、ここで一年の收容所生活を送り、復員まで第二中隊員として皆さんと行動を共にして、八月一日〜三日つづきのお先祖の命日も何とか切り抜け、無事復員することが出来たのである。それにつけても大陸の戦野に散った今は亡き戦友のことを思う時、万感胸に迫りただただ冥福を祈るのみである。

老母との交流

また、こんなことが心に残っている。次期作戦に備え了尖に待機していた時、こわれた寝台にうづくまっていた老婆、逃げて行くにも歩行が出来ない、どうにでもなれと覚悟をきめてよこたわっていたのだと思う。顔を見ると国に残している祖母に本当によく似ている。その時、この老婆に孝養をつくそう。気の毒なこの姿、心のなかではどう思っているだろうか。その日から食事をはこびました。しかし食べてくれない。自分が食べながら進めても食べない。根気良くはこぶ、ようやく心が通じたのか、自分のみている前で顔をほころばしながら少し食べてくれた。こんな嬉しかったことはない。やがてやせ細った手を出し、わが子にでも会っているように笑顔

で自分との出会いを待っていてくれるようになった。心の交流が出来たのです。戦いの最中、老婆との出会い、少しの孝養、せめてもの罪ほろぼしが出来ました。

そのことを思うごとに、異国の人と言葉は通じなくても真心は必ず通じあうのだと、身を持って体験しました。

戦後四十五年、振り返って世のなかのこれほどにもかわったことは驚きのほかで、たとえようもなく、まったく夢のようだ。高度成長、科学の進歩、経済大国となんをとあげても戦後の発展は目覚ましく、喜ばしいかぎりである。こうした高度の暮らしのなかにあって、人の心はなぜ豊かで大らかなゆとりがないのでしょうか。人としての理性を失い、歩むべき道を迷い、人情を忘れた色々の悲惨な出来ごとが連日報道されている昨今、お互いの心の交流がないのではないかと思う。過去には「ごめん」「こらえて」という言葉で多少のあやまち、出来ごとを許してくれ、また、許してもあげた。

今はどうであろうと、ちょっとのことにもすぐ被害者、加害者とにらみあい、賠償金で話をつける。以前の

「ごめん」「許して」の言葉はどこへ行ってしまったのだろう。人の心は機械ではない。万物の霊長たる人間、他の動物たちが笑う。人のため、世のため、国のために尊き汗と血を流して滅私奉公で頑張ってきた六十有余年、紅顔の美青年も何時しか頭は白くなり、漸く顔には年輪のしわが増え始めました。この「しわ」こそ人生の尊き体験と試練に打ち勝った最高の勲章である。

今も現役で山林労務長として緑の山と共に生あらん限り頑張るつもりです。

私の歩みを振り返って終わります。

軍隊生活の思い出

滋賀県 村木 茂

昭和十七年一月十日、私の生涯にとって精神的にも肉体的にも一番思い出になる軍隊生活の第一歩が始まった。入隊するその日まで在郷軍人として色々な訓練に参加させられ、いまにして思えばお経の方がはるかに軽い

軍人勅諭を純真なる心で「わが国の軍隊は世々天皇の統率し給うところ云々」と、便所にいくときも一生懸命に必死におぼえたものである。

伏見深草の歩兵第九連隊第一中隊に入隊することになった。入隊当日は日の丸の旗と歓呼の声に送られて張りつめた気持ちであった。中隊長は陸軍大尉宗林朝翁という方で、送って来た入隊者の家族の者たちも現在の戦況を十分説明され、その雄姿は今も私の目の底に記憶されている。着た物はすべて営庭で即時着換えさせられ、だぶだぶの靴に足をあわせと古兵にやかましくいわれるなど、むちゃくちゃな着換えで第一夜をなんとか、うとうとしたと思うまもなく起床ラップである。寒風吹きすさぶ営庭で鬼の住むような深草の初年兵第一日が始まった。また、消灯ラップや京阪電車の音を寝台のういで聞き、涙を流した。軍隊はつらいつらいと思っただけでも仕方がない。親のことを思うのも、もはや観念して、純粹無垢な青年の心で、飯あげや演習、銃剣術、射撃と同年兵とひけをとらないよう自分なりに頑張った。

しかし人間の天性というか、生れながらの一徹という